

K 209.5
デワ
5

出羽太平記

五



出羽太平記卷之五

目録

長上夜黄門景勝公使者至來之車

陌義光公の姫君重頼之系河原を教書

一巻

家康公御太子御別命降御進敷

出羽之信士為加藤山形地集



K209.5

D5

於兼山の界石丹野とある事茂竹の記
 細谷金我孫子城守江兵衛光之進討記
 余傳野軍評定



長上杉中納言景勝公使者の事
 豊後守岡本有左衛門景光以後高橋景光
 三成転送を在弟と云降の傳上杉景
 景勝公と申合とては日景勝を以て
 純下、隣國の諸大名を容く、以後ひ
 たり、山形より伊達を以て、つらねの
 秀頼公を以て、後の徳國の武士を以て
 御守り、御守り、義光を以て、御守り

おのゝち園東に奉向し正徳元年は新し
思ふとのよきなりし上原隆信の忠
事とちまはは有なりし中江隆信の
と仕えとのよきなりし中江隆信の
りんが忠信は成吉思汗の嫡子
理美義原は成吉思汗の嫡子
義守山内右衛門尉義久氏家隆信は
隆信の嫡子なりし中江隆信の

ち光忠其命を院のつとめ集め評議あり
ち光忠義光の嫡子なりし中江隆信の
量徳ありし中江隆信のつとめ集め評議あり
隆信の嫡子なりし中江隆信のつとめ集め評議あり
のよきなりし中江隆信のつとめ集め評議あり
のよきなりし中江隆信のつとめ集め評議あり
のよきなりし中江隆信のつとめ集め評議あり
のよきなりし中江隆信のつとめ集め評議あり

ありし事山中とてありて其後海より源
 ありし世の世に世を接捨石をもと企て年
 景徳小一味と色をいふものひよとては其
 は事なき極の上を色は使を切捨石
 會津と谷向と色をいふものひよとては其
 名守と名守と色をいふものひよとては其
 代氏男の世に界東一の大名とては 家康

ひと敵討せんと思ふにものなる一人
 の是れは世に色をいふものひよとては其
 法の徳将とも一味の世に色をいふもの
 りし世に世に色をいふものひよとては其
 ら秘を法智會津と集りて大軍
 なる色一かへ色をいふものひよとては其
 の小智をいふものひよとては其
 長途の難を色をいふものひよとては其

侍の款言はあつた候に
あつたは政入をうけりし
と得ん事付ひく味言討負
途の切取何とてゆり給ん
月まづ倉庫に五交向候
畢後一七程より通る
と 産原公上は江を
後日星宿南境を交向
はと野山

長谷堂のあつた候に
を送り給り景勝も終
をまはるに必押寄
小國中へ入田一
地軍といひ
第一も
ゆり
と

茫然と包しとてはあつて固い心も
とては一味あつて包し者作せしむる
これ 家康公を頼朝公に比し侍る
とて上杉景虎公を頼朝公に比し侍
とて遠くはるるつらきこと何所も
とてかくは御座るといふ包し者も
とて交ひはれんとて包し者も
給ふの状と包し者も

及前の成しとて包し者も
又より加勢を包し者も

景勝公侍者といふ陣羽衣の
を包し者も道しとて義光公に
い中我一味とて包し者も
三徳とて包し者も
城豊前守とて包し者も
とて包し者も

同心入をたたくに歳交金銀降を
うせぬふとも言ふに似出はるるに
いふをいふをいふをいふをいふを
と上りぬが美光公志と山田公志
を記すをいふをいふをいふを
い後からいふはるるに似出はるるに
石集軍陣用をいふをいふをいふを
あふふふふふふふふふふふふ

を哲外伝のそのこといふに我君を景
勝と名一味と名いふに思ひの如くいふ
とほりあふふふふふふふふふふ
家康公の清忠を投捨合陣と名一味
五人といふに秀頼御車と山形と名
て山頼公といふに中へと家康公といふ
敵對をいふに中へと社といふに
ゆゑ大敵のいふに大岡秀頼御車

恨と深く悔しむるに由る事なりと云ふは
 殿は初巻の口惜有りと云ふは其國白雲次郎頼
 朝の口惜有りと云ふは是れもいと云ふと
 送りまゝにいと云ふは口惜有りと云ふは
 八幡の口惜有りと云ふは是れもいと云ふは
 口惜有りと云ふは是れもいと云ふは
 思人三十六人有りと云ふは是れもいと云ふは
 口惜有りと云ふは是れもいと云ふは

口惜有りと云ふは是れもいと云ふは
 思人三十六人有りと云ふは是れもいと云ふは
 口惜有りと云ふは是れもいと云ふは
 思人三十六人有りと云ふは是れもいと云ふは
 口惜有りと云ふは是れもいと云ふは
 思人三十六人有りと云ふは是れもいと云ふは
 口惜有りと云ふは是れもいと云ふは
 思人三十六人有りと云ふは是れもいと云ふは

たののほほふまふとて存しねし何
こゝに某家因縁多しなる事あり大跡の
百のほほ原なるほほ原とてしる親
入とてしる六女人の富の思ひ大跡
るほほ原とてしる事とてしる
後遺守者とてしる事とてしる
けらだのちしほほ原のほほ原
のふたれとてしる事とてしる

物恩のほほ原めしる事とてしる
を身とてしる事とてしる
あゝ何とてしる事とてしる
よりとてしる事とてしる
腹すきとてしる事とてしる
とてしる事とてしる
ゆとてしる事とてしる
中とてしる事とてしる

君の山を後には休む由りしと思はれ
道なきまじし何れ敵は心はたすも衆人
友は心はたすも衆人
一筋の思ふ事ありしは我君の心は厚き
石君の心は厚き木君の心は厚き
この心は厚き心は厚き心は厚き
命を捨てる人の心は厚き
終は思ふ事ありしは我君の心は厚き

人々を止りしは思ふ事ありしは我君の心は厚き
中へは思ふ事ありしは我君の心は厚き
りる心は厚き心は厚き心は厚き
花は心は厚き心は厚き心は厚き
情は心は厚き心は厚き心は厚き
心は厚き心は厚き心は厚き
心は厚き心は厚き心は厚き
心は厚き心は厚き心は厚き
心は厚き心は厚き心は厚き

尾張玉國の住人日登^比下登宇^比の娘の夜
 御百花^比山は松雲^比の娘の腹^比御^比はち花
 とやせーはちやの^比の^比者^比を^比令^比け^比れ^比く
 母上^比北野^比の別^比者^比松海^比流^比の娘^比を^比
 うの^比人^比を^比有^比と^比見^比出^比物^比を^比あ^比を^比出^比物^比を^比
 出^比く^比一^比あり^比一^比の^比一^比か^比も^比一^比れ^比え^比ん^比ど^比う^比か
 切^比る^比一^比日^比を^比取^比る^比一^比身^比を^比と^比ま^比す^比
 り^比一^比ひ^比を^比物^比に^比入^比ら^比し^比て^比あ^比の^比世^比六^比人

の女^比中^比の^比一^比の^比家^比後^比の^比女^比を^比車^比
 輪^比に^比入^比る^比一^比の^比女^比を^比下^比の^比女^比を^比
 見^比る^比一^比一^比条^比を^比一^比下^比羊^比の^比あ^比の^比女^比を^比
 一^比一^比条^比を^比一^比下^比羊^比の^比あ^比の^比女^比を^比
 推^比使^比の^比後^比一^比日^比石^比田^比は^比新^比中^比浦^比三^比成^比後^比の^比
 右^比邊^比の^比所^比に^比居^比る^比一^比一^比條^比を^比一^比の^比女^比を^比
 の^比一^比一^比條^比を^比一^比の^比女^比を^比
 一^比一^比條^比を^比一^比の^比女^比を^比

教を以てして... 紀伊紀伊...
 つらぬか... なるが...
 神のま... の...
 お...
 正...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...

百一と云ふ所のいふ事しるすに
きものくろきもあれぬ身か
成り事とおの世は若縁とて
平なげに縁を何はずもみ所
はなもあつた心若くは縁
うりまゝあつた急なうり
行徳とて縁親子とて世の
とほりせむと頼むとて佛の
は慈悲

。後の世きおれ蓮の縁と成るは
あのとてくろきもあつた
宿りなまはに何事とて世は
そし思先く捨てせ縁とて
縁とてあつた縁とて縁と
の縁とてあつた縁とて縁
たつとてあつた縁とて縁
あつた縁とてあつた縁

結むすののりたはいはらむに叶あひぬたはらむ
たののりたのたはらむに叶あひぬたはらむ
はらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
かへらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
そかへらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
ぞやとんばかへらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
はらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
てふ新あらをきとれりて行いくも願ねがふに叶あひぬたはらむ

信まことと申まをすも義よし頼たのむに叶あひぬたはらむ
しとて信まことに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
ありてはらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
備いそへ世よ若わかき頼たのむに叶あひぬたはらむ
うらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
とせらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
松まつ葉ははらむに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ
あふ人ひとの信まこと娘むすめに叶あひぬたはらむに叶あひぬたはらむ

局飛石初しきし遊石の如くなり

淡のふ小浪の石塔の塔を筑し

は年々わたりあふらんわたりん伝ふ

ちりしらんむらるる石飛石なり

海へのまじりてあふる

のまのふたりあふる

目新まりんあふる

なり正辞也

きものふは院のまじりてあふる

なるもあふるあふる

しあふるあふるあふる

樂世界の教を正浦に傳へし

世にあふるあふるあふる

仙千代毛の如し日此物守り

らのあふるあふるあふる

そわくあふるあふるあふる

此の器を抱き水晶の珠おとす
いづのよりのついでに口結くちむすはくはく
美石の口屋くちやの形勢かたち一るはくはく
ちをばねるしんじらうらうらうらうら
おはくはくはくはくはくはくはく
うらうらうらうらうらうらうら
接つぎするはくはくはくはくはくはく
と協きょうする

のらぬ世をくつて海うみのまはり
はくはくはくはくはくはくはく

又もはくはくはくはくはくはくはく
尾張おわりの玉たまの住人すまひ山口やまぐち松まつをら始はじ白しろ装ま束たば
る巻まき際ぎはの海うみ上うへ名な美み石いし屋やの口くち結むすを懐なつか
抱かかるはくはくはくはくはくはくはく
自みづか居い上うへ人ひとはくはくはくはくはくはくはく
廻まわりはくはくはくはくはくはくはく

善哉善哉 善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

善哉善哉善哉善哉

七卷... 善哉善哉善哉善哉

娘をこの箱に封じては子に視せしむ
口唇を帯からし給ひては後飾あなの
影とて衣袂えびのなほさるる花を
しめくもたらぬをたよきを
と信を待てるも右は玉の降ぬと
くらしし一とそをのりちゆかぬ
江陰ふんか普門ふんか品と徳海とくかい入る殿とのの
平石ひらいしのなる海生うみ善所ぜんじょと云

廻向一のひら

一とよた慈悲あまのつちを
ころめ月つきのほろ
八番やっぺん月つきは國くにの佳よ人ひと佳よ美みの
花はな七ななり始はじむ
のし書かきとて
切きらひ海うみを
むらさきと花はなのたつ

あはれし海にたづねてはしるはしる道成
をこころのちかき十巻・たのみのちか
もせしむる光形ひかりかたち指さしとまはれぬいふ
らへし意い悲かなあはれし茶ちやあはれしあはれし
毎まいのほろ酒さけ徳とく備びのりいしはれ
たふしむるさうさうしむるさうさう
左ひだり後のちのちかきしむるはしるはしる
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれし
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

さうさうさうさうさうさうさうさう
十一巻のしるはしるあはれしあはれしあはれし
宿上しゆくじやうのしるはしるあはれしあはれしあはれし
ほろ酒さけ徳とく備びのりいしはれ
寺てら一の美みあはれしあはれしあはれし
作しやくせしむるさうさうさうさうさう
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれし
あはれしあはれしあはれしあはれしあはれし

は車馬の如くはるかに何處までも
去らんとすべしとてしるすも
まがねの如くはるかに何處までも
去らんとすべしとてしるすも
淀のほとけの如くはるかに何處までも
去らんとすべしとてしるすも
中つとまをせらわんば太閤も
おもひとらんば今も何處までも
深倉より一に法師もたせし
はるかに何處までも去らんとす

おとろひの如くはるかに何處までも
去らんとすべしとてしるすも
はるかに何處までも去らんとす
はるかに何處までも去らんとす
はるかに何處までも去らんとす
はるかに何處までも去らんとす
はるかに何處までも去らんとす

なつかしき
罪の如くはるかに何處までも
去らんとすべしとてしるすも

かく十二巻目なりし二祥世の事

浦陀きりのむしは日とあはれと

ゆふもしらつたふすまもあはれと

十二巻には出将殿連肥前守に

の始りし人のちあはれ世を

りし人もれと互に思ふと

くちの事と祥世の事

ちの人は程にうらやま

こゝろにありし事

十四巻に自左邊のあはれ

玉帯しり人のほろ

の園に安の櫻井しり

なまはれをさし

ゆえにそのあはれ

琴を調へし源氏おほ

あはれひらきし

岩屋の所はあつたにやうな事
も

とてくらのに世はあはれん事

とてくらのに世はあはれん事

十の右の所の所はあつたにやうな事

打井の所はあつたにやうな事

廿一の所の所はあつたにやうな事

宮はくちせし宮殿とらへん事

山家老の所はあつたにやうな事
その所はあつたにやうな事
あつたにやうな事

中はあつたにやうな事

その所はあつたにやうな事

箇名とよしはあつたにやうな事

女人佛石可有類一切はあつたにやうな事

南無妙法蓮華經と唱へん事

おぬトなごころの波のこころ
車と云ふ一冊の音程冊と書と被
入宮儀の時々法業徳徳補の外を
このころころと果てぬんを古武術
かたの四方十九歳と云ふの他人
生杖権しぬと云ふ人の娘と云ふ
百と云ふを云ふと云ふは恩深き
親類の事と云ふと云ふは其の事

はたふ宮女のこころと云ふ年と被
月と云ふはさくらむと云ふ
後世の事と云ふは其の事
有りては其の事と云ふ大雲院
房と人の事と云ふは其の事
かくと云ふは其の事

はたふ建と云ふは其の事
ふこの事と云ふは其の事

凡二番とたうも果の十七を越るは
木村常陸守がのりせしむ女房へは
とらせしむるは
君一とていひしむるは
辭世の歌はらじ
ん

夏といふは
まかぬまの
はら

凡四番とすはすは
ていひの
うら
お
お
お
お
お

あはれ佛のうらみなき心家

其のまゝにうらみなき心家

とく人の妬まざる人 江花信

信者ゆくは老の江花と鶴せんごうのた

人よはるかたのあはれが家信

うら

羊のまゝにうらみなき心家

あはれあはれなき心家

其のまゝに大屋の何守の始せんごう生年

うらみなき心家の江花のうらみなき心家

あはれなき心家の観かん念

あはれなき心家の佛のうらみなき心家

あはれなき心家のうらみなき心家

廿七番に於て其の江花のうらみなき心家

あはれなき心家のうらみなき心家

あはれなき心家のうらみなき心家

ゆるしりく年を右観音——

つぎけりゆく正法の中の出ぬるま

年よりゆくを正法に誰かたのまん

其の中へにゆくまの正法大徳正師正法

の徳よりゆくまの正法大徳正師正法

その正法大徳正師正法大徳正師正法

字よりゆくまの正法大徳正師正法

まゆりゆくまの正法大徳正師正法

正法大徳正師正法——

若しゆくまの正法大徳正師正法

若しゆくまの正法大徳正師正法

若しゆくまの正法大徳正師正法

若しゆくまの正法大徳正師正法

若しゆくまの正法大徳正師正法

若しゆくまの正法大徳正師正法

若しゆくまの正法大徳正師正法

といふ事なりけりばまよひはあをきりてんば
 若くまよひはあをきりてんば
 わたしはあをきりてんば
 形ひはあをきりてんば
 位ひはあをきりてんば
 まよひはあをきりてんば
 あまのこはあをきりてんば
 平昔あをきりてんば

一 行へんはあをきりてんば
 佛の心はあをきりてんば
 世一番東はあをきりてんば
 如存と観はあをきりてんば
 若くまよひはあをきりてんば
 まよひはあをきりてんば
 之目を見はあをきりてんば
 うまのこはあをきりてんば

じきんをよは米の女房世言ぬら蒼世軍
 ちがわぬ世六人の女房まてはくしの
 ちのち新世いよみつるぬらぬれゆいん
 人きく人昔の国いよびるぬらぬら
 のくくか心か心か心か心か心か心か
 るるるるるるるるるるるるるるるるる
 齊るるるるるるるるるるるるるるるる
 の上常事なるるるるるるるるるるるる
 神を

一から幾らくら比き文福四年八月廿日
 の朝より申の朝よりまを件本のをまき切
 るるるるるるるるるるるるるるるるる
 たるぬらぬらとッねらぬらぬらぬらぬら
 是をとりッて入るるるるるるるるるる
 や真途まき 焰魔王のまをて個を林
 阿防羅利たが四形つたを什集ぬら何債
 るるるるるるるるるるるるるるるるる

仍来也かきつ——しんせき——みぬ——音さかひ

いしおりの後き——えよ——いんバ義光公の

一紫款いせんの属ゆかりせはあつどは物しぬとあさく

二三日には食くるもたまさか、た記たあさくは

外か沈しんのあひあ常じょうも危あやうくるといふいの年

たれば恨うらみものごとくあひせたたいいの善ぜん理

まもては玉たまの和わ降くだたまふ宗むねを正ただすあり

きりり言ことば端はなとちち御ご身み進しん有あらると山やま形

みく田た寺てら他たとちちを山やま建た立た遊あそべれ專せん權けん

寺てらと身み一ひと田た吊たひひ佛ぶつとちちあり

由便初の世より古石系身他と衣上中の洋を宗の
互配とわくしぬは身下とちとち ます

家いへ康やす公こうの御ご事ことを一ひと歳とし二ふた寸すん有ある大おほ川がは系

毛けとりと太おほ連れん——と名なを沙い加か有ある

志し村むら伊い直ちかとちちは——織お田た信のぶ長なが公こう

と進しん上じやう有ある内うち昂あき

家いへ康やす公こう御ご事ことを一ひと歳とし二ふた寸すん有ある大おほ川がは系

沖波橋いんばしに後中をつ〜

義光公よしかみにたかく思ふらんるる文脈を

辛卯十月しんまに武州ぶしゅうに在る國白鳥氏御出

陳の如ちん 宗原公むねはらに御佐ごさしく御下ごくだ白鳥

〜に御義光公ごよしかみの二男にむねに鳥羽とりはをつ使つかひ奉ほうせ

ゆひく日ひ来きたの御ご下くだ入いり御ご下くだ奉ほうせらるる二

男おとこに御ご下くだをつ上あ上あ仕つかせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

れ御ご下くだ奉ほうせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

宗原公むねはら御ご下くだ奉ほうせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

ま〜に一國いっくにの主ぬしの子こをつ今いま度たび御ご下くだ奉ほうせらるる

〜に御ご下くだ奉ほうせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

名なの上のうへの字なをつ不ふ駿すま河か守まも親ちかとらぬ

山やま地ぢ是こゝの〜に御ご下くだ奉ほうせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

左ひだり思おも合あはははは會あ津つ清きよ原はら思おもひひかかん

定さだ〜に御ご下くだ奉ほうせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

と御ご下くだ奉ほうせらるる御ご下くだ御ご下くだ奉ほうせらるる

家康公勇烈令降下御進奉

し事

云程下山形に北柳急に大坂に馳付
景勝叛逆の事一任をせしむるに
家康公自ら討つて討つて討つて
慶長六年六月十日大坂を攻めしめ
伏見を一日御進奉ありし事
日暮津城を松平主殿に取らせし事

伊仕色隠くは作付國七月十日
つせいの事考思ふは御進奉ありし
義光公より御進奉書とばし奉下
十のり之真方の事降下し御進奉ありし
御進奉ありしは御進奉ありし
同右宮一野利出の御進奉ありし
水戸の御進奉ありし御進奉ありし
御進奉ありし御進奉ありし

今度又倉津奉^ニ進^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
兼^テ一^ノ國^ノ心^ヲ以^テ守^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
有^リク^ニ自^ラ作^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
中^ニ一^ノ心^ヲ以^テ守^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
雖^モ亦^モ存^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
名^ノ向^クの^事を^止肯^卯雖^モ亦^モ存^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
と^テ一^ノ心^ヲ以^テ守^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
此^ノ又^ハ亦^モ存^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ

肯卯
ウケガウ
インハチ

治^ス事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
治^ス事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
治^ス事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
味^ヲを^守ル^事ニ^付テ^は是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
此^ノ由^ノ國^ノ心^ヲ以^テ守^ル事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
權^ノの^事を^守ル^事ニ^付テ^は是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
倉^津奉^進事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
光^ノ公^ノ事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
小^山事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ
倉^津奉^進事^ニ付^テ是^レ迄^ノ進^ム道^ニ

よ方の凶徒を江津野行とて同日廿八日申を
まき武藏野好むとて 河内一國

は城に入らざる

出羽陸奥へ諸士あり加藤山形

馳集る事

武列津戸河内へ山形への馬奉書七月

十三日山形へ下る事 河内へ書きたるは

ことなほ書津表の事ありと報に思ふとの

有沖懇一作とて上を河内への信行

加勢とて山形とて河内へ申下知

有るる方河内申下る事池田とて河内の

條軍の陣微よとて河内へ申下る事

私入る事河内 家原公河内へ申下る事

進軍の事とて河内へ申下る事義光公

も河内の事とて河内軍の御定一書と

書津野の事とて河内へ申下る事

送りぬる事なり付日をもつては天子様の
 詔將山形下野ありては先皇御到行
 一書に南部信直等平騎しとて既而
 二書に北田房左衛門平六郎平陸三
 書小戸信直等平平部百部陸四書
 五書田原七部百部陸五書六部公
 陸三百部陸五部陸二百部陸加保
 其存八部陸陸陸陸陸陸陸陸陸陸

孫四部六部陸陸陸陸陸陸陸陸陸陸
 其存一百千六百部陸陸陸陸陸陸
 人々一書陸陸陸陸陸陸陸陸陸陸
 家康公上の一味同心全く遠要方有家
 連判起信文ありて陸陸陸陸陸陸の
 名取ありて陸連判の思あり
 其後義光公宣ひし事本信はし
 攻入るる欲し難しと出合せ給はし哉

此起請久奈
 陸上の事あり

公家易く破るるは危し軍の仰成
可也山形より西へ山形と西へ
國中一乳ふは洋口の金銭と味名
利運と御座ると宣ひんをば名は弟志
うと危し御弟一安しと弟次口一義
克公のは名代とと嫡子御理人弟
康徳大将とと六千五百騎南初信
徳守先鋒の大将なりとば上野山と味名

陣とと後陣をとりと山形と河内
和と上吉ゆと石田法部少輔之成
逆國西の諸大名のこゝに自ら
依見大伴の城と及とからゆと如馬
を記と吉事ととれが 家康と御
も居洋の亂逆をお給小山とと
御上は有る者山形との早言松の
引がごとく加勢の諸將たると

いやくと存せしむるは亦おと敵か
思ひて欲す一味のこの男と降参
るはあつたも一を拒絶し去りて
と神僧の納めは海内に出る
及このも五河と義光公とたれ
但ももくもわくく降参りて
こは向かひ自能能言る満延佐本
神もも秀個里身舞後守安らは

笑ひ急れ義光公の口をわらわし
格は法将上りとの降参の者も
面への隠しに退き去るの的遠
きたる連判阿の
たもく起清人を破りて
家康公討ち多し
まの國中の者も力を
万道へけりる

と伺ひの^{かん}下^{かん}知^{かん}つ^{かん}屋^{かん}一^{かん}
亦^{また}い^{また}あ^{また}ま^{また}り^{また}の^{また}彦^{また}道^{また}なる^{また}の^{また}侍^{また}何^{また}
の^{また}用^{また}に^{また}さ^{また}は^{また}る^{また}を^{また}兵^{また}卒^{また}遣^{また}へ^{また}る^{また}を^{また}利^{また}お^{また}
さ^{また}め^{また}ん^{また}と^{また}世^{また}を^{また}同^{また}士^{また}軍^{また}と^{また}も^{また}ら^{また}し^{また}て^{また}総^{また}附^{また}
ハ^{また}敵^{また}と^{また}空^{また}を^{また}驚^{また}れ^{また}る^{また}を^{また}一^{また}ん^{また}是^{また}大^{また}軍^{また}
の^{また}和^{また}の^{また}也^{また}を^{また}い^{また}は^{また}じ^{また}や^{また}た^{また}後^{また}の^{また}終^{また}を^{また}
敵^{また}と^{また}一^{また}味^{また}の^{また}出^{また}ん^{また}事^{また}を^{また}汗^{また}を^{また}か^{また}し^{また}
ま^{また}と^{また}西^{また}の^{また}後^{また}の^{また}と^{また}ん^{また}先^{また}の^{また}の^{また}也^{また}

考^{くわう}と^{くわう}は^{くわう}余^{あま}の^{くわう}
家^け康^{かう}と^け奉^{ほう}ん^けと^け存^{ぞん}と^けよ^けと^け右^うの^け人^{にん}
の^け如^に勢^{せい}を^け頼^{たの}ま^けあ^けに^け謀^{ぼう}す^け小^{せう}ハ^け大^{たい}
一^け得^{とく}不^ふ可^か敵^{てき}と^けせ^けと^けも^け衆^{しゆう}を^け身^みに^け
可^か悲^ひ少^{せう}を^けあ^ける^け侮^ぶを^け辱^{じやく}を^けん^けて^けす^け
去^{きょ}卒^{そつ}の^けと^けち^けら^けし^けて^けす^けて^けす^けて^けす^け
二^に也^にも^にい^にへ^にる^に意^いを^にこ^に目^めを^にめ^にら^にる^に家^け
一^に系^{けい}を^にも^に思^しり^に一^に筋^{じゆん}を^に念^{ねん}

一命をうらん一銭いあり一身の是
恨をもつめ何成大部ぬるはらの
玉皇人のあしむしむ理ゆきしと実ひ
くれをひつむしむしむは後日老とぬん
家木血氣まきまきせうろあゆむむし
卒尔ぬるをまきまきしむ印る者ぬ
しと退出なるしむしむる

於兼山園所丹野と勘定

後時抄智と事

丹野と勘定後時といふその原由の
老解とて難延延候兼山のあゆむしと
新けまきまきるがうろり買は老切の者
又もんと世度下あか解のはら石泉に
入るあまんとしむる園の本言しとまきまき
まきと通しむるあまんとあゆむの法軍塔
使るをぬるしむるあゆむとあまんと

固たが少せうをも用もちひ急いそに道みちをひきくすまの
自み中ちゆうままききくくれれととるる意いをを集ありり合あひひののた

此こ度ど山さん形かたちのの如ごとく
宗そう廉れん公こう

伊い下げ知ちままのの山さん形かたちとと同どうくくのの山さん形かたちとと同どうくく

より部べいのの地ちををももつつにに居ゐるる所ところににああるるにに

引ひ返へすすかからら上あるる上あ杉すぎ坂さか上う杉すぎ坂さか上う杉すぎ坂さか上う杉すぎ坂さか上う

義ぎ光こうととすすのの伊い下げ知ちのの平へいををくくくくのの道みちと

弓きう中ちゆうのの率りつをを急いそにに集ありり合あひひののた

は首くびをを山さん形かたちととすすのの伊い下げ知ちのの平へいををくくくくのの道みちと

急いそにに集ありり合あひひののた

急いそにに集ありり合あひひののた

人ひとのの身みをを急いそにに集ありり合あひひののた

中ちゆうのの意いをを急いそにに集ありり合あひひののた

坂さか上う杉すぎ坂さか上う杉すぎ坂さか上う杉すぎ坂さか上う杉すぎ坂さか上う

急いそにに集ありり合あひひののた

急いそにに集ありり合あひひののた

おのちひ
公藤乃あるあはれ心もなまはすは豊武
者あま百済をよむあまを彼らに居る
よしあまをよむらんとおまの
くらららん〜道くらぬをな〜
とほ〜
のあまのほ〜
ま〜
らん〜
らん〜

孫さき苗あはれ〜
やあまの侶前〜
らんを解〜
お破〜
何せむ〜
あま〜
ら〜
ら〜
ら〜

待^{もち}ひくともしきとわれば皆くは同^{どう}
地^ちたる山形^{やまがた}の保^{たへ}ちを聖^{せい}旨^みの表^{あらわ}す
在^ありし事^{こと}を定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に
し承^{うけ}りしるるる意^いを承^{うけ}りし山^{やま}も園^{おん}所^{じょ}
の事^{こと}を定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に
左^{ひだり}の山形^{やまがた}より世^よ常^{とこ}新^{あらた}と無^なき事^{こと}も有^あり
もむと何^{なに}かあつきの前^{まえ}時^{とき}に日^ひ東^{あづま}の洲^{すま}に
花^{はな}身^みもさし教^{しやう}智^ちの偉^{たか}く如^{ごと}く松^{まつ}の令^{れい}

長^{なが}時^{とき}よりし事^{こと}もあつきの保^{たへ}ちを同^{どう}の
同^{どう}と保^{たへ}ちを定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に
類^{るい}を保^{たへ}ちの定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に
保^{たへ}ちを定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に
目^めの事^{こと}もあつきの保^{たへ}ちを同^{どう}の
保^{たへ}ちを定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に
女^{によう}童^{どう}の事^{こと}もあつきの保^{たへ}ちを同^{どう}の
眼^{くま}を定^{さだ}めたる息^{いき}を面^{おもて}に

まらゝる大將の國武者山の本陣の要害
小籠こまとる後子ごと見みてとる奥おく想おもたつ
當望あきの第神だいじんめととるれく我われ一いつり
後日ごじつと山やま初はつとまつとれが我われ光ひかり公こうとま
五洲ごしゅうの信將しんじょうめととる方かた睦むつ者しやとる侍しやく衆しゆ
アレヤとの大將だいじょうと老人らうじんの曾そとつは計けい策さく
はとく一日いちじつ一夜いちやとるる為ためとる神湯せんたうのま
拓たくより援えん難なんとるるを侍しやく衆しゆと我われ一いつり

はとる長なが後ごと奥おく陣じん山やま形かたちとるるひか
本陣ほんじんとるるの如ごとくは度たの程ほど智ちよ
くもとるるまはとる山やま形かたちとるるひか
とるる長なが後ごと奥おく陣じん山やま形かたちとるるひか
小首こくびとるる長なが後ごと奥おく陣じん山やま形かたちとるるひか
西にしとるる國くにとるる長なが後ごと奥おく陣じん山やま形かたちとるるひか

相あ谷や合あ我われ并なら城しろ主ぬし江え口くち吳ご清せい諸しよ
光ひかり清せい付つ死しとるる事こと

つらねんふら

上杉黄門景勝公は官上出羽守義光

公は一味ありて包みぬる由は是なり

田代守有は

外 家康公御時方と成りて是なり

法將如母とて山形練集の佐々友

浪人入の義徳公は是なり義光公

とありてはぬる由は是なり

家の子弟等も百集とて是なり義光公

返るる由は是の集りては國の法將也

一歩も勝つ南境を返るる由は是なり

うらまゝなるる報りては是なり

一階に在りては是なり

及ぶるに及ぶるは是なり

合圍也の法将名一味とては是なり

扱一二年と分ては是なり

及ぶるに及ぶるは是なり

野が小山の陣ふるくより^二岩^三集りて
 家原を^二余と^三よるへい^二母^三の^一ま
 ろ^二原^三山形を^一在りて^二お^三お如^二岩^三の^一佐^二將^三
 よの^二降^三飛^二終^三る^二西^三への^一お^二城^三に^二引^三退^一
 下^二や^三お^二母^三は^二う^三この^二ゆ^三を^二先^三の^一味^二を^三別^二を^三得^一
 下^二と^三お^二ん^三と^二り^三と^二や^三お^二お^三如^二岩^三の^一佐^二將^三
 急^二に^三山形^一の^二義^三光^二を^三お^二退^三は^一
 軍^二の^三首^二速^三に^二と^三と^二お^三は^二城^三を^一看^二目^三

上^二泉^三を^一水^二頭^三杉^二系^三常^二陸^三守^一を^二将

と^一と^二出^三陣^一お^二山^三形^一南^二に^三押^一し^二を^三り^一
 出^二陣^三の^一後^二に^三万^二あり^三長^二く^三連^一を^二り^三山^一あり
 城^二と^三り^一南^二に^三り^一向^二く^三河^二を^三沿^一り^二あ^三る^一お^二是^三
 原^二山^三形^一を^二お^三り^一て^二こ^三の^一に^二に^三て^一の^二や^三を^一
 使^二り^三て^一東^二の^三こ^一を^二片^三倉^二山^三と^一り^二城^三を
 見^二ら^三り^一て^二ま^三の^一見^二を^三お^二原^三を^一切^二り^三
 是^二大^三の^一口^二を^三お^二り^三て^一南^二西^三の^一山^二城^三

山への乃木氏の山守に任じて性
 勇傑なる山守に任じて性
 傳代の侍江口守光傳とて血縁接
 勇とて片皮の猪氏とておのまじく
 とどろく思ふ事多し人の割とてをり
 ひど剛のそのゆゑあつて揚子と山守
 をあつて二男小吉守を甥に松田忠信傳
 西物とてしよ下立百葉湯楮尾別書

一義光公光傳の傳とては景勝と
 一味とては守光の弟とては守光
 と有る也一傳とては守光の弟とては守光
 大勢とては守光の弟とては守光
 守光の弟とては守光の弟とては守光
 山形守光の弟とては守光の弟とては守光
 光清傳とては守光の弟とては守光
 一守光の弟とては守光の弟とては守光

妻子ニむかひ
 八首ノ一冊
 妻子ニむかひ
 自由ノ人

働けりしとて 山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

地 山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

山形 義光の御孫 山形

るをよむるはあはれなる事なり
之故に今も此の世に
歌のよむるはあはれなる事なり
笑科と成るは生る事なり
を北へ行くはあはれなる事なり
此の世に積るはあはれなる事なり
を北へ行くはあはれなる事なり
にありてはあはれなる事なり

中上と云はるるはあはれなる事なり
飯田播磨守石田忠左衛門
日野伊賀守と知るるはあはれなる事なり
由緒の事見物なればあはれなる事なり
一に後地二百挺より百張程の古物あり
百金騎の事見物なればあはれなる事なり
若者衆の事見物なればあはれなる事なり
其の形も事見物なればあはれなる事なり

妻子とも名譽も奪せしは恩は耐え遠く
ハシラ送る事一とありては
今を世母の愛の心も
大勢とては深く付記
とまの心すの義光公は
送る事一とありては
とれしと云ふ人
同じ思ふ夜軍
中

の藤は是よりく六一のあは
とありては梅と要害と
種々の御と梅は
直に山城の色部
春日は近衛村
席上は水と
治慶長五年九月
押しと云ふより

ふらめん

石部いしべの毛けをからしてしらしく車の付き

竊うすんと中をとりて東東部部信信理理屯屯是是をを

古古後後と大軍軍におもひらりて東部部をを

玉玉を取らしめしてしらしくみゆりてしらしく東

義義光光海海佐佐一一ののんん者者一一のの在在仕仕のの

家家をとりて東東部部をを信信理理屯屯ににてて

とと云云むむ一一とと我我がが陣陣ににてて守守りりをを

出出立立せせししてて信信理理屯屯のの軍軍をを守守りりをを

うらま

軍軍一一おお負負ししてて城城中中のの策策をを身身にに

つつりりてて進進めめししてて東東部部信信理理屯屯ににてて

とと云云ふふ出出ぬぬののままはは信信理理屯屯ににてて

とと云云ふふ東東部部信信理理屯屯ににてて

東東代代のの西西部部をを信信理理屯屯ににてて

とと云云ふふ東東部部信信理理屯屯ににてて

信信理理屯屯ににてて

とと云云ふふ東東部部信信理理屯屯ににてて

リヤム
投擲するは偶々として比叡の根柢を
とちけしは陸軍を以て
の難事と表す一長は捕獲を以て
と備えおろけ由や平とを以て
アハは謀令は陸軍を以て思ふ
之も亦光緒の軍制を以て古備に備
掛はくは軍制を以て古備に備
右石大井を以て比叡の根柢を

死を以てその根柢を以て比叡の兵艦も
貝打槍迎撃を以て名経を以て其を以て
右今日主人執るれは比叡の根柢を以て
無阿彌佛を以て捕獲を以て其を以て
そんも其の軍制を以て比叡の根柢を以て
之も亦光緒の武略を以て其の軍制を以て
敵の捨てる陸軍を以て其の軍制を以て
右く比叡の根柢を以て其の軍制を以て

いさのらんこの件御も尚責より討負
りん人如惣にも御買ももりのまぶ
明日ハ人よも今返破らんあなと兼
有るまぶ家も如傳も何れもの中
あらん祈後討死もい定る侍あり
一が相もあゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
今もらんのおも一様かんよんヌワヤ今
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

是を見ん櫓の窓の中いなるをいひた

らんゝゝゝ射もゝゝゝ百騎もゝゝゝ射休

ゝゝゝ修程も是を執場もゝゝゝ人の死ぬ

るも知んづゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あり付もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一もも川ちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

手首死んも系統親行もゝゝゝゝゝゝゝ

子うさゆも龍胆に射しうる見
ては面も推し我をよと攻めれば何れ
天魔たりしものも一はるる
まも光清は付記の如く
あましくも横縁せぬも
色威の儀と書物長き下
地の方左のいふ節甲と猪首と
巻物作りの三人すの左力を佩経作

と儀の上と書物白丸鏡と百字と
條多し一鏡を武十文字の
申す面をぬく実と入二男小吉光秀
物の書作法直と物と一家の御本
おのひしと書物一とゆきと
と削り得ると別本西角少く入遠の
あましく一巻と書物一呼とんて攻め
はしと書物一と書物は書物一

持積も猶投捨一なるハツと引退く年
貞元人のゆゑハ河東の石の
之よりのお侍止山城より今も子攻め
あぐんもあぐんもあぐんもあぐんも
あをともあつ活地のももともあつ城の
東なる片倉山とのかり城を目的とす
る色ぬのとくあつをわつとん
射をともあつ城のち猶もあつ無のあつ

可防ぬく今なるハツと引退く年
の兵を操を戦ふゆけり我を今もあつ
と攻つともあつ城は只あつ先遣行
持つともあつ城は只あつ先遣行
今一軍軍一もあつ引退く年

くればはよもあつちり中逢ふ川甲
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ
くまか名相相授る返同指しちる心ひ

西らせんとく雲霞のくまか名相相授る返同指しちる心ひ
播磨ちんを身く名相相授る返同指しちる心ひ
川名をく返同指しちる心ひ
返同指しちる心ひ
小橋名相相授る返同指しちる心ひ
名相相授る返同指しちる心ひ
名相相授る返同指しちる心ひ
名相相授る返同指しちる心ひ
名相相授る返同指しちる心ひ
名相相授る返同指しちる心ひ

七つをいひ財を掃くを討てるに中を
長馬真先^{まへ}先^{まへ}より百騎^{ひやく}年おめくく
大花を^{ちか}移し取れぬ^と我を^{わが}国^{くに}の
此の^{こゝ}方^{かた}移^{うつ}され^れて二三河^か復^たき
くら^{くら}と荒^ある^るを^を知^しる^るに^に有^ある^るは
より^{より}取^とり^りの^のり^りと^と明^ある^る返^{かへ}り^り
石田忠^{いしだ}兵^{へい}衛^ゑと^と礼^{らい}軍^{ぐん}の^の中^{ちゆう}か^かお^おと^となる^{なる}矢^や柄^{へい}
を^を扱^あり^り寒^{さむ}河^か江^えに^に流^{なが}る^る日^ひに^に世^よに^に世^よに^に世^よに^に

忠^{ちゆう}臣^{いん}先^{まへ}安^あを^を初^{はつ}と^と返^{かへ}り^り金^{かね}掃^{はき}り^りを^を
を^を討^うて^て何^{なに}の^の目^めあ^ある^るに^に度^た山^{さん}形^{がた}
立^たつ^つ人^{ひと}の^の面^{めん}を^を知^しる^るに^に度^た山^{さん}形^{がた}
討^うて^てせん^{せん}に^に馬^{うま}の^の縄^{なわ}に^に返^{かへ}り^り家^{いえ}を^を
席^{せき}を^をい^いま^まを^を付^つけ^けて^て我^{わが}を^を中^{ちゆう}に^に返^{かへ}り^り
亂^{らん}を^をい^いま^まを^を付^つけ^けて^て掛^かへ^へて^て文^{ぶん}字^じを^を付^つけ^け
を^をい^いま^まを^を付^つけ^けて^て命^{いのち}を^を鹿^か鹿^かより^{より}
らん^{らん}と^と名^なを^を拂^{はら}ひ^ひの^のり^りと^と世^よに^に世^よに^に世^よに^に

切く早く誠く小き百奇侮あるは
醜なるをいふもいふに
たゞ此道を行くは
至る指すもあはれ
死體をたれを
七也清く陳を
らば道を
の矢先や山

江肥守日野
ある人の死體を
り田舎を
山城の
光徳三
この首
梅の
急上

三の四目に一は山崎法有と上吉の味方
利運何れは山形も皆一カを為しん
一カをせむ一は所あり一は心ある者なり
と懐くもよたつて中とをば他は色や
寔に主水の祐も心も存能然根を
叩くもあが根も心も存能然根を
古徳も云へる事あり一陳能破殘堂
今も七まん必勝はるる一孫も味方

勝兵と山形を走ら七まん中何の難ひ有
るは主水と山形と
主水は一は山形を走ら七まん中何の難ひ有
るは主水と山形と
将たるも一は山形を走ら七まん中何の難ひ有
るは主水と山形と
この一は山形を走ら七まん中何の難ひ有
るは主水と山形と
他國へ出陣し一は山形を走ら七まん中何の難ひ有
るは主水と山形と
この一は山形を走ら七まん中何の難ひ有
るは主水と山形と

陸守^ち知^り邦^こ修^{しゆ}理^り亮^{りやう}と^と和^わと^と陸^{りく}花^か千^{せん}
 挺^{てい}弓^{きゆう}又^{また}百^{ひやく}張^{ちやう}軍^{ぐん}兵^{へい}三^{さん}千^{せん}余^{あま}騎^き相^{あひ}隨^ま入^い相^{あひ}谷^やす
 東^{とう}と^と西^{せい}里^り浦^{うら}長^{ちやう}谷^や守^{しゆ}の^の城^{じやう}と^と
 押^{おし}寄^よす

65952



山形県立図書館



1-0336085-9